

要旨

近年、人間関係の希薄化が社会的な問題となっている。現代人の求める人と人との関係は、他者に気遣いをしない気軽な対人関係を求める一方で、密接な対人関係に対するニーズを含む矛盾した感情関係であると考察できる。そのため、求めるニーズに結果が伴わない現代的人間関係の狭間で葛藤状態が継続し問題の要点となっている。

関係性の変化は、私の専門とする医療・看護でも問題となっている。医療の発達や高度医療の細分化によって健康寿命の伸展や健康促進が急速にはかられてきた。しかし、医療の高度化・細分化は、患者と医療従事者の関係性を疎遠なものとしてきた。医療従事者の、患者へ向けるまなざしは、患者自身ではなく身体の部分について向けられるようになった。多くの病院では、医療の高度化にともなう、システム化により、医療従事者はケアすることが機械的なものとなっていった。このような現状を反省し、医療・看護の本来のあり方を取り戻すために、近年では、患者主体の医療についての議論がなされるようになってきている。その議論の概念の一つに、ケアリングがある。

ケアという言葉は、医療・看護以外にも、哲学や教育、福祉などの領域で頻繁に用いられている。そのような議論の過程から、ケアリングという概念が生じてきた。広く一般の知るところとなったケアに比べ、ケアリングは、ケアを重要視する臨床医療従事者の間でもまだその認識は低い。ケアリングという行為は親から子へ、教師から学生へ、医療従事者から患者へ当たり前のように日常として行なわれてきた行為であり、その概念は見えづらいといわれている。

ケアリングは、主観的行動を初発として生起されるものであり、客観化しにくい。さらに、日常生活の中で営まれ、生きるということの中に埋め込まれているため明確化しにくい概念である。また、社会における人と人との関係性の希薄化や、高度に細分化された医療・看護の流れの中でさらに見えにくくなり、それまで当たり前存在していたケアリングが見失われ、その存在価値も失われてきてしまったのである。

近代社会の反省の下、ケアリング概念の復興が論議されるなかにあつて、ケアリングは様々な領域において論議されてきているが、その概念は明確となっていない。看護領域におけるケアリング研究者のレイニンガーは、看護の本質はケアリングであると述べており、またケアリングが看護の中心的な概念の一つであることが浸透しつつある。

しかし、看護領域においてケアリングが看護の本質であるのか、また看護におけるケアリングの所在もまだ、明らかとなっていない。さらに、ケアリングが看護の中心的な概念であるならば、ケアリングは、これから看護師を目指す基礎的な学習を行っている看護学生にとっても、重要な概念の一つであろうし、身に着けたいものの一つである。

このように、ケアリングは教育や看護において重要性と必要性が高まりつつある中心的

な概念のひとつである。そこで、本論文では、看護基礎教育におけるケアリングの意味と現状、そして教育の可能性について明らかにする目的で研究を行った。

まず、第1章では、日常的な用語として使用されるケアとケアリングの意味と関係について考察しケアリングが、「ケアされる人と、ケアする人との関係性」さらに、「ケアされる人と、ケアする人の相互成長が、捉えられるべきであると結論付けた。

第2章ではケアリングの先駆的な研究者であるメイヤーロフ (Milton Mayeroff) とノディンクス (Nel Noddings) のケアリング論を省察し、ケアリングは理論であると同時に、行為そのものに対する意識が重要である。人間対人間の関係性を主軸に、ケアする人と、ケアされる人の相互関係性によって、双方が成長していくという関係性がケアリングであることを明らかにした。

第3章では、看護におけるケアリングの代表的な研究者であるレイニンガー (Madeleine M. Leininger)、ワトソン (Jene Watson)、ベナー (Patricia Benner) らのケアリング論を省察し、看護領域のケアリングとは、双方向性と相互成長が要点であり、ケアリングは、看護における人間対人間の関係性の基盤であると結論付けた。

第4章において、先行研究の分析から、日本の看護におけるケアリングとは、人間対人間の関係性の場において発揮できるという前提条件と、その場における相互成長を目的とした具体的行動や、体勢の2点が達成された時の関係性であることを明らかにした。第1章から第4章までの論考を基に、看護におけるケアリングとは、密接な対人関係における相互成長性目的とした、ケアする人のケアされる人への態勢のことであると定義し、ケアリングは看護の中心的概念であると結論付けた。

第5章では、看護基礎教育においてケアリングがどのような意味で存在し、その現状を明らかにするために看護学テキストにおけるケアリングの記述内容をテキストマイニングを用いた分析と、学生がケアリングを学ぶ中心的な場面である臨地実習におけるケアリングに関する先行研究の分析を通して、学生は看護学の講義で使用されるテキストを通してケアリングの知識的側面を学んでいると考えられ、そして、臨地実習においては、その知識としてのケアリングを、患者との関わりや、看護の実践を通して学びとしていることが明らかになった。

第6章では、特に臨地実習の中でも、患者との関わりに制限が多く、学生の困難感の強いとされる、成人看護学急性期実習において、学生はどのようなケアリングに結びつく学びを得られているのかどうかを先行研究から明らかにし、さらに、学生は成人看護学急性期実習の経験から、実際にケアリングを高めることができているのかについて実証的な調査を行った。その結果、学生は実習後には患者への共感性を高めており、患者との関係性を基に、自己成長感を高めることを明らかにした。

第7章では、これまでの研究結果を総括し、看護基礎教育における意味と教育の視点について論考し、学生のケアリングを育むためには、ケアリングについての理論や考え方などの知識面の教授と共に、学生が患者との関係性を通してケアリングについて思考したり、

自らの経験をリフレクションしたりできるように、講義と実習の一体化に基づくカリキュラム構成を構築することや、講義や実習における教材研究の必要があることを指摘した。そして、何にもまして、学生は看護師を目指す人であり、患者をケアする人であると同時に、看護教育においてはケアされる人である。すなわち、教員は学生に教育を通して、倫理的な理想を支え自然なケアリングの源泉になるように、学生自身にケアリングされた経験を持つように関わることも重要であると考えられ、これらを看護基礎教育におけるケアリングの教育の課題として、この課題についての今後のさらなる検討が必要であることを指摘した。